

日蓮大聖人御書全集

じやくにちぼうごしよ

寂日房御書

新版  
1268  
〜  
1270

じやくにちぼうしよ

# 寂日房御書

こうあん ねん がつ にち

弘安 2 年 ('79) 9 月 16 日

58 さい

おん 音 信

これまで御おとずれ、かたじけなく候。

そ じんしん 受

夫れ、人身をうくることはまれなるなり。すでにまれな

じんしん ぶつぼう

る人身をうけたり。また、あいがたきは仏法、これもまた

おな ぶつぼう なか ほけきょう だいもく

あえり。同じ仏法の中にも法華経の題目にあいたてまつる。

けつく だいもく ぎょうじや か こじゅうまんおく

結句、題目の行者となれり。まことにまことに過去十萬億

しよぶつ くよう もの

の諸仏を供養する者なり。

にちれん にほんだいいち ほけきょう ぎょうじや かんじほん

日蓮は日本第一の法華経の行者なり。すでに勸持品の

にじゅうぎよう

げもん

にほんこく

なか

にちれんいちにん

二十行の偈の文は、日本国の中には日蓮一人よめり。

はちじゅうまんおくなゆた

ぼさつ

のくち

八十万億那由他の菩薩は、口には宣べたれども修行した

ひといちにん

ふしぎ

にちれん

る人一人もなし。かかる不思議の日蓮をうみ出だせし父母

にほんこく

いっさいしゆじよう

なか

だいかほう

ひと

ふぼ

は、日本国の一切衆生の中には大果報の人なり。父母とな

こ

かなら

しゆくじゆう

にちれん

ほけきよう

り、その子となるも、必ず宿習なり。もし日蓮が法華経・

しやかによらい

おんつか

ふぼ

ゆえ

れい

釈迦如来の御使いならば、父母、あにその故なからんや。例

みようしようごんのう

じようとくふじん

じようぞう

じようげん

しやか

せば、妙莊嚴王・浄徳夫人・浄蔵・浄眼のごとし。釈迦・

たほう

にぶつ

にちれん

ふぼ

へん

たも

多宝の二仏、日蓮が父母と変じ給うか。しからずんば、

はちじゅうまんおく

ぼさつ

う

たも

じようぎようぼさつ

八十万億の菩薩の生まれかわり給うか。また、上行菩薩

とう しほさつ なか すいじやく ふしぎ おぼ そろろ  
等の四菩薩の中の垂迹か。不思議に覚え候。

いっさい もの

な たいせつ

てんだい

一切の物にわたりて名の大切なるなり。さてこそ天台

だいし

ごじゆうげんぎ

はじ

みようげんぎ

しやく

たま

にちれん

名乗

大師、五重玄義の初めに名玄義と釈し給えり。日蓮となの

じげぶつじよう

い

もう

りこう

ること、自解仏乗とも云いつべし。かように申せば利口げ

き

どうり

指

きよう

に聞こえたれども、道理のさすところ、さもやあらん。経

い

にちがつ

こうみよう

よ

もろもろ

ゆみよう

のぞ

に云わく「日月の光明の、能く諸の幽冥を除くがごとく、

ひと

せけん

ぎよう

よ

しゅじよう

やみ

めつ

もん

この人は世間に行じて、能く衆生の闇を滅す」と。この文

こころ

あん

たま

しにんぎようせけん

ひと

せけん

の心よくよく案じさせ給え。「斯人行世間（この人は世間

ぎよう

いっ

もんじ

じようぎようぼさつ

まっぼう

はじ

に行じて）の五つの文字は、上行菩薩、末法の始めの

ごひやくねん しゆつげん

なんみようほうれんげきよう

ごじ

こうみよう

差

五百年に出現して、南無妙法蓮華經の五字の光明をさし

出

むみよう

ぼんのう

やみ

照

いだして、無明・煩惱の闇をてらすべしということなり。

にちれん

じようぎようぼさつ

おんつか

にほんこく

いつさいしゆじよう

日蓮はこの上行菩薩の御使いとして、日本国の一切衆生

ほけきよう

受

持

すす

やま

に法華經をうけたもてと勧めしはこれなり。この山にして

怠

そうろう

いま

きようもん

つきしも

と

い

もおこたらず候なり。今の經文の次下に説いて云わく

わがめつど

のち

まさ

きよう

じゆじ

「我滅度して後において、応にこの經を受持すべし。この

ひと ぶつどう

けつじよう

うたが

うんぬん

人は仏道において、決定して疑いあることなけん」云々。

もの

でしだんな

ひとびと

しゆくえん

おも

かかる者の弟子檀那とならん人々は、宿縁ふかしと思つ

にちれん

おな

ほけきよう

ひろ

ほけきよう

ぎようじや

て、日蓮と同じく法華經を弘むべきなり。法華經の行者と

いわれぬること、はや不祥なり、まぬかれがたき身なり。彼

樊 噲 張 良 將 門 純 友

のはんかい・ちようりよう・まさかど・すみともといわれ

もの な 惜 ゆえ 恥 おも ゆえ おく

たる者は、名をおしむ故に、はじを思う故に、ついに臆し

おな 恥 こんじよう 物

たることはなし。同じはじなれども、今生のはじはもの

数 ごしよう たいせつ ごくそつ

かずならず、ただ後生のはじこそ大切なれ。獄卒・

奪 衣 婆 けんねおう さんずのかわ 端 衣 装 剥 とき

だつえば・懸衣翁が三途河のはたにていしようをはがん時

おぼ ほけきよう どうじよう たも ほけきよう

を思しめして、法華経の道場へまいり給うべし。法華経は

ごしよう 恥 隠 ころも きよう い はだか もの ころも

後生のはじをかくす衣なり。経に云わく「裸なる者の衣

え うんぬん ごほんぞん めいど 衣 装

を得たるがごとし」云々。この御本尊こそ冥途のいしような

れ。よくよく信じ給うべし。おとこのはだえをかくさざる女しん たも 男 肌 隠 め

あるべしや。子のさむさをあわれまざるおやあるべしや。こ 寒 哀 親

釈迦仏・法華経は、めとおやとのごとくましまし候ぞ。しやかぶつ ほけきよう 妻 親 そうつろう

日蓮をたすけ給うこと、今生の恥をかくし給う人なり。にちれん たも こんじよう はじ 隠 たも ひと

後生はまた、日蓮、御身のはじをかくし申すべし。昨日は人ごしよう にちれん おんみ 恥 もう きのう ひと

の上、今日は我が身の上なり。花さけばこのみなり、よめのうえ きよう わ み うえ はな咲 果 嫁

しゅうとめになること候ぞ。信心おこたらずして、姑 そうつろう しんじん 怠

南無妙法蓮華経と唱え給うべし。度々の御音信、申しつくなんみやうほうれんげきよう とな たも たびたび おんおとづれ もう

しがたく候ぞ。このこと、寂日房くわしくかたり給え。そうつろう じゃくにちぼう たま

くがつじゅうろくにち  
九月十六日

にちれん  
日蓮

かおう  
花押